平成２８年度

―第13回（定例・臨時）―

教育委員会議事録

開　　会	平成２８年１１月２４日　　１５時００分					
閉　　会	平成２８年１１月２４日　　１６時１０分					
会議場所	ホテルリガーレ春日野（奈良市法蓮町）					
委員出欠	花山院弘匡	出	佐藤　進	欠	森本哲次	出
	藤井宣夫	出	高本恭子	出		
議事録署名委員	教　育　長					
	教育長職務代理者					
書　　記	奈良県教育委員会事務局 企画管理室					

議　案　及　び　議　事　内　容
○吉田教育長「ただ今から、平成28年度第13回定例教育委員会を開催いたします。本日は佐藤委員が欠席ですが、定足数を満たしており、委員会は成立しております。」
その他報告事項
○吉田教育長　「その他報告事項について、ご報告をお願いします。」 ○荒木教育政策推進室室長補佐　「11月９日に桜井市立図書館において開催されました、平成28年度第１回教育サミットの内容について、ご報告させていただきます。 　議題は２点ございまして、１点目の奈良県文化振興大綱（素案）について、地域振興部長から説明がございました。 　続いて、２点目の平成28年度全国学力・学習状況調査と奈良県学力・学習状況調査の結果について、教育長からご報告をいただきました。総合教育会議でいただいたご意見等を踏まえ、今回追加させていただいたことについてご説明します。資料５の20ページでは、過去４年間の小学校別の相関図を示しています。小学校ごとの学力と学習意欲また規範意識に関する項目の過去４年間のデータを分析すると、学力と学習意欲には0.65、また学力と規範意識には0.56という高い相関が見られました。また項目間で調べると、学習意欲の項目の中でも『授業が分かる』が最も高い相関が認められました。資料23ページは『授業が分かる』項目と相関の高い質問項目を調べた結果です。その結果『授業の中で目標が示されている』、また『授業で自分の考えを発表する機会が与えられている』との相関が非常に高いことがわかりました。 　こうした資料説明の後、アイランド形式で各市町村学校間のばらつき、変動の原因、現状を改善するための取組についてグループ協議が行われました。各アイランドからあった主なご意見をご紹介します。特にばらつきの原因としては、学校間の取組の差、校長による目標設定ができているかどうか、教職員の資質や意欲の差、また地域とのつながりの差、家庭における教育や保護者の目標意識、経済格差等が挙げられました。今後の取組としては、教員の資質・能力の向上についての意見が最も多く、また教員に求める力として授業力や教科等の指導力はもちろんのこと、児童生徒理解、学級経営力、調整力、精神的な強さ、また地域とのつながる力が必要であり、多様な保護者への対応も含めて、教員が教育に集中できる環境づくり、教員のモチベーションの向上が非常に大切であるとのご意見をいただきました。また地域とのつながりや地域人材の活用が必要であること、調査結果については、経済力や学習時間、同一集団の経年変化や、授業時数との相関等、詳しい分析結果を市町村にも提供いただきたいとのご意見もいただきました。 　このような討議を受けて、最後に知事から、結果を学校現場の先生に伝えて、細分析を教員自身にさせて欲しい、生徒ではなく教員や学校の目標設定がなされているのか確認して欲しい、また子どもの学習意欲を向上させる方法について、生徒から問いが出てくるような教育が必要であり、県や市町村で生徒の意欲を高める授業についての研修プログラムを作っていきたいとのご意見をいただきました。 　以上です。」 ○小谷教職員課課長補佐　「平成28年度文部科学大臣表彰の教育者表彰についてご報告します。 　この文部科学大臣表彰は要項に基づき、学校教育の振興に関して特に功績顕著な教育者の行動を称え、これを文部科学大臣が表彰するもので、昭和34年から毎年実施されています。要項には、公立学校から各都道府県３名以内と規定されており、奈良県から３名推薦させていただいています。 　本年度の１人目、荒木　保幸　現奈良県教育委員会事務局教育次長です。中高一貫教育となる県立青翔中学校の開校、その後郡山高等学校長、現在の奈良県教育委員会事務局教育次長として、強力なリーダーシップを発揮されています。 　２人目は、植村　佳央　広陵町立真美ヶ丘中学校長です。奈良県全体の中学校長会の会長として今年度は勤務され、県教委教職員課管理主事、係長としても指導助言、県教育の一層の発展に尽くされた方です。 　３人目は、山田　均　王寺町立王寺南小学校長です。県内の奈良県小学校長会の会長としてご

議 案 及 び 議 事 内 容

尽力いただいています。学校教育課主幹、総務室参事として奈良県教育委員会事務局で勤務された経験があります。
　この３名を被表彰者として文部科学省に推薦し、表彰されることになりました。
　以上です。」

○吉田教育長　「このことについて、何かご意見、ご質問はございませんか。」

○吉田教育長　「（全国学力・学習状況調査と奈良県学力・学習状況調査の結果について、）学校ごとの特徴の理由はわからないのですね。」

○深田学校教育課長　「はい。それで聞き取りに何校か行かせてもらった結果、６年生の時期までの間に学級崩壊があったり、または不登校で実は特別な支援を必要とする子どもであったり等聞いております。また取組として、落ち着いて学習する学年であることを伝え、落ち着いて学習したら試験の結果も良かった等聞いています。」

○吉田教育長　「学校にロウデータは渡していますか。受験者はクラスごとに集計されますか。」

○深田学校教育課長　「ロウデータを渡しています。ロウデータの中で集計が可能です。一人一人のデータがあるので県でも学校、学級別に集計できます。」

○花山院委員　「結果を受け、現状を変えるために何かをしないといけないと思います。」

○吉田教育長　「４年間で相関がみられたということは、学校全体の教員、また校長の姿勢にも原因があると思われます。」

○藤井委員　「なぜ教員になったのかを再度自覚させることも必要と思います。教科指導よりももっと大事なことが必要と考えています。」

○高本委員　「採用試験の時は皆、教員になりたい、子どもを育てたいという想いをもって合格してくれていると思いますが、現場に入ると思っていたことと違うことがたくさん起こって、その中で子どもを指導していく、そして挫折してしまうことがある。学力試験が数日後にあるとすれば、熱意がある先生なら、備えて復習しておこうかと指導することもあると思いますが、自分がこんなことをするために教員になったのではないと、自分の仕事を軽く見ている先生もいると思います。先生に叱咤激励して頑張っていただくしかないのではないでしょうか。先生はまじめにやってくれていると思います。あまりにもいろんなことが現場にありすぎて、かわいそうと思うことがあります。そこも加味していただきたいです。」

○藤井委員　「再び熱意を自覚させるには、先生を評価したらよいのではないでしょうか。でなければ刺激を受けなさすぎです。」

○小谷教職員課課長補佐　「教員の人事評価は今年度から実施することになり、今は校長が評価している最中です。来年度、また効果的に運用できることを目指します。」

○森本委員　「茨城県で開催された全国都道府県教育委員協議会総会で、先生キャリアアップのために、子どもたちだけのインターンシップだけではなく、先生が社会全体の仕組みを勉強するために、インターンシップも行う必要があるといった話題も出ていました。」

○吉田教育長　「特に特別支援学校の先生には必要だと思います。閉鎖性が強いところもあるので、『きずなカフェ』で研修を試行的にすることも取り組んでいきたい。」

議　案　及　び　議　事　内　容
○花山院委員　「学力試験については、奈良県ではモチベーションが低いのか、定着していないのではないでしょうか。」 ○深田学校教育課長　「なぜ（学力試験を）しないといけないのかといったご意見を聞くことがあります。国がこのような試験を行うのは、つけさせたい力を表しているメッセージであるため、学校の先生方が過去問題を見て、どのような力をつけさせたいのかしっかり見てほしい。そして普段の授業の中でどのようにそのような力をつけさせるのか考えてほしいと、機会があるごとに伝えているところです。」 ○吉田教育長　「先生は、なぜ自分のクラスの子どもたちが、『授業で目標が示されていない』と思っているのかいないのかを確かめないのでしょうか。０点をとる子どもがいれば、点数だけでなく背景も含めてなぜなのか、自分の考えを発表する機会が与えられていない子どもが自分のクラスの中に３割４割いればそれはなぜなのか、（学力試験は）そのようなことを点検するための機会だと思います。」 ○深田学校教育課長　「試験のあと、結果を見てできてないところをできるようにする、そのためにはどのようにすれば良いかを考えるのは現場の先生になります。教育環境は子どもたちそれぞれで異なりますので、機会あるごとに個々に見てほしいと伝えていますが、浸透していないのが現状です。」 ○藤井委員　「子どもの姿勢、やろうという姿勢が大事ですが、家庭環境が変わって、学校に求められる内容も変わってきています。」 ○吉田教育長　「だから教員の意識も変わらないといけないと私は思います。」 ○吉田教育長　「他にご意見、ご質問が無いようですので、原案どおり承認してよろしいか。」 ※各委員一致で承認 ○吉田教育長　「その他報告事項については承認いたします。」
○吉田教育長　「その他連絡・報告事項についてお願いします。」 ○深田学校教育課長　「前回の定例教育委員会でご質問のあった、英語の授業を半数以上英語で行っている教員の割合が、全国平均と比較して大きく下回っていることについての原因について、回答します。 まず状況を説明させていただきます。平成27年度において、授業の半分以上を英語で行っている中学校の割合は奈良県が26.4%に対して、全国は56.7%。高等学校においては、奈良県が32.7%に対して全国が49.6%です。このことについては、生徒の英語による言語活動を充実させるためにその指導方法として英語で授業を実施することの必要性を、英語担当教員が充分認識できていないことが原因の一つと考えられます。 また平成27年度において、奈良県で英検準１級以上の英語力を有する英語の教員数の割合は、中学校では奈良県が25.3%、全国平均が30.2%。高等学校では奈良県が45.4%、全国平均が57.3%です。英語担当教員の英語力についても課題が残るところです。 指導方法の改善、英語指導力の向上を目指して、中学校・高等学校の英語担当教員に対して、県では英語指導のパワーアップ講座を開いたり、また英語指導力向上の研修講座を実施しているところです。この成果を確認するために、全受講者を対象に英語検定の受検を義務づけており、また受講料を補助しています。

議　案　及　び　議　事　内　容
以上です。」 ○小谷教職員課課長補佐　「前回の定例教育委員会でご質問のあった、平成28年度ストレスチェック実施結果についてご報告します。これは、改正労働安全衛生法に基づき、平成８月８日から26日に実施しました。教育委員会全体の対象者は3,489名で、これは事務局の職員と県立学校の教員を合わせた数です。 このうち、2,943名がストレスチェックを受検しました。全体の受検率は84.35%で、事務局は93.29%、県立高校は83.8%となっています。なお知事部局における受検率は86.81%で、ほぼ同程度です。 その中で高ストレス者数は、受検者のうち292名で、高ストレス者率は全体で9.92%、事務局は10.31%、県立学校が9.87%でした。なお知事部局における高ストレス者率は16.4%です。 以上です。」 ○藤井委員　「医師の指導はあるのですか。」 ○小谷教職員課課長補佐　「高ストレス者と判定された者は、事務局については産業医、県立学校については健康管理医が面接を実施します。」 ○森本委員　「誰が高ストレス者かどうかは、所属長は分からないのですか。」 ○中村次長　「個人情報になるため、上司であっても高ストレス者と判定された者が誰なのか判りません。面接は本人の申出によります。基本的に個人情報は公表しないこととなっていますが、この取扱については来年度以降検討したいと考えています。」 ○森本委員　「結果を活用できるような方法をご検討いただければと思います。」 ○吉田教育長　「それではこれをもちまして、本日の委員会を終了します。」